

# 書 評

感染と免疫（第4版）▶ J. Playfair, G. Bancroft 著／入村達郎, 伝田香里 監訳／  
加藤健太郎, 佐藤佳代子, 築地 信 訳

感染と免疫（第4版）／J. Playfair, G. Bancroft 著／入村達郎, 伝田香里 監訳／加藤健太郎, 佐藤佳代子, 築地 信 訳／東京化学同人 2017／B5判 264ページ／3,700円＋税

本書は、John Playfairによる感染症学、免疫学の総合教科書として英国から1995年に初版が刊行されて以来、22年の歴史を誇る*Infection and Immunity*の日本語版である。初版が入村達郎によって翻訳されて以降、第2版、第3版の邦訳は発行されておらず、第4版は初版以来の待望の日本語版となる。とりわけ糖鎖免疫を専門とする入村達郎・伝田香里の監訳により、原著に勝るとも劣らない完成度の高い内容となった。この度の改訂で、特に進歩の早い免疫学の最新知見が新たに追加され、up to dateなトピックスも漏れなく網羅されている。

微生物学と免疫学は感染症を学ぶ上で両輪であり、いずれを欠いても真の理解は得られない。この両分野をバランス良く、過不足なく、しかもコンパクトに264ページにまとめた本書は、初めて感染症、免疫学を学ぶ学部生から大学院生、さらには研究室での輪読にも最適であり、初学者から専門家まで満足させる内容に仕上がっている。医学部、歯学部はもとより、薬学部、理学部、農学部、看護学などあらゆる分野の講義に用いるスタンダードな教科書としても相応しい。

本書を通じて特に強調されているのは、生物学的視点で

あり、特に進化に関する著者の深い洞察が随所に感じられる。こうした観点で、本書は単なる実験事実を羅列した教科書というより、楽しく読める科学書と言っても良いかも知れない。丁寧な翻訳によって文体は統一されており、読みやすく疲れない。図表は奇をてらわないシンプルなものばかりで、枝葉末節を省き、重要な基本概念・原理を視覚的に理解することを重視する本書の基本姿勢が良く見てとれる。

また、各章に挿入されている練習問題とその解答は、通り一辺倒なそれとは一線を画し、著者の生命科学に対する畏敬の念と情熱が感じられる生き生きとしたオリジナルな文体で構成されており、単体としても楽しく惹き込まれる読み物として成立している。

本書でも強調されているように、未だ免疫学には未解決な問題が山積している。また一方、感染症を引き起こす病原性微生物のうち、実際に培養可能で感染を再現できる微生物はごく一部であり、感染ルートや疾患発症機序などまだまだわからないことだらけである。本書を、これからの免疫学、感染症学を勉強したい初学者が最初に手にする教科書として自信を持って奨めると共に、本書が、より多くの若い研究者がこの分野に興味を持ち、新しい発見に繋げてくれるきっかけになることを祈ってやまない。

(山崎 晶 大阪大学微生物病研究所／  
九州大学生体防御医学研究所)